

まえがき

本書の狙い

近年、北朝鮮による弾道ミサイル発射や核実験、世界一流の軍隊を目標とする中国による急速な軍備増強などの長期的な傾向に加え、2022年2月にロシアによるウクライナ侵略が始まるなど、日本を取り巻く安全保障環境はこれまでになく厳しいものとなっている。そうした状況の中、国内外において伝統的な国家間の安全保障への関心が高まっている。また、日本政府は、同年12月、9年ぶりに国家安全保障戦略の改定を行った。その文書で注目すべきは、5年後の「2027年度において、防衛力の抜本的強化とそれを補完する取組をあわせ、そのための予算水準が現在の国内総生産（GDP）の2%に達するよう、所要の措置を講ずる」と明記されたことである。日本は、50年以上にわたり防衛費を国民総生産（GNP）またはGDPの1%程度に抑えてきたことを考えると、歴史的な転換と言えるだろう。まさに今日、安全保障論という学問的な見地から具体的に日本の安全保障問題への理解を深めることのできるテキストが望まれているのである。

本書は、安全保障論の入門的かつ本格的なテキストである。安全保障論は国際政治論（または国際関係論）の中心的な下位領域として発展してきたため、本書は国際政治論のテキストとしても読むことができる。学部生や一般読者を主な対象としている他、この分野を専門としている大学院生や研究者、そして安全保障に関係する省庁の方々にも役に立つ内容も盛り込んでいる。

本書の三つの特徴

1) 安全保障論・国際政治理論・政治思想の基本文献への手引きとなっている。

本書では、学問としての安全保障論の解説を目的としているため、安全保障論の教育で重視されてきた基本文献（図書・論文）を中心に説明を行う。欧米の大学においては、学部であっても授業の予習として、学生用に平易に書かれ

た教科書ではなく、研究者用に書かれた学術的な図書（の一部）や論文を数点読ませるような課題が出ることが多い。学生にとって学術文献を読むのが大変なことは事実だが、その方が、より深い理解に到達できるからである。ただ、本書は、特定の分野における図書を一冊ずつ紹介するブックガイド（例えば赤木・国際安全保障学会編 近刊）でもなければ、欧米でよく売られているような文献抜粋集（例えば Art and Greenhill eds. 2015）でもない。代わりに、各章のテーマごとに複数の基本文献を組み合わせて、それぞれの重要なポイントや相互の論争を紹介している。本書を読むことにより新たな疑問がいろいろ生じてきて、基本文献を読みたいという気持ちにさせることが本書の狙いである。そのため、基本文献の選択においては、できるだけ日本語に翻訳されているものを優先している。

本書では、特に**国際政治理論のリアリズムとリベラリズム**の観点から安全保障問題を考察することを重視する。基本的に、観察による検証が可能な、国際政治現象の原因と結果に関する仮説を提示する経験的理論に焦点を当てる一方、「正しい戦争とはどのようなものであるべきか」（正戦論）など国際政治における善悪の価値判断、道義や倫理を考察する規範理論については扱わない。

なお、第一次世界大戦以降に発展した欧米の国際政治理論のリアリズムとリベラリズムには、それ以前の長きにわたり蓄積されてきた**政治思想**の強い影響がある（これは社会理論をベースとするコンストラクティビズムにはない特徴である）。本書では、リアリズムに影響を与えた政治思想を**現実主義**、リベラリズムに影響を与えた政治思想を**自由主義**、と名称上の区別を行っている。リアリズムとリベラリズムへの理解を深めてもらうために、関連する現実主義と自由主義の思想も紹介していく。

数ある国際政治理論の中でリアリズムとリベラリズムの二つに注目するのは、これらの理論が国際政治論において中核的な地位を占めているからだけではない（宮岡 2019）。関連する現実主義や自由主義の思想とともにアメリカや日本の国家安全保障に関する戦略的思考の土台になっているからでもある。すなわち、これらの思想や理論を学べば、国家安全保障の論理が見えてくるのである。これは、本書独自の視点と言えるであろう。

2) アメリカを中心に発展してきた伝統的な安全保障論に焦点を当てている。

アメリカ合衆国（以下「アメリカ」という）の伝統的な安全保障論には、三つの特徴がある。第1に、研究上の主な対象は、**国家のレベルにおける安全保障の軍事的側面**である。ただし、軍事以外の側面（経済・環境など）や国家以外のレベル（個人・社会など）も、軍事的な国家安全保障に関連する範囲で分析対象に含まれることがある。第2に、**国際政治論の理論**に基づく学術的な研究が盛んなことである。アメリカは、安全保障論の土台となっている国際政治論の分野も牽引してきた。アメリカの安全保障論は研究者の層も厚く、学問的に発展している。第3に、研究成果には、政策が課題としている問題の性質を理解する上で有益な知識を提供できるという意味での**政策関連性** (relevance) があることが期待されている。ただし、日々の政策決定に対し特定の選択肢を提言するという意味での**政策志向性** (orientation) までは求められていない (Gray 1982, 2)。

日本においてアメリカの伝統的な安全保障論に着目する必要性がますます高まっている。その理由としては、次の三点を挙げることができる。第1に、日本周辺の東アジアでは、北朝鮮の核・ミサイル開発や中国の軍事的な台頭などの問題があり、**国家のレベルにおける安全保障の軍事的側面**の重要性は一層増している。日本の国際政治論や安全保障論では、国際政治を理解する上で欠かすことのできない安全保障の軍事的側面について十分な考察がなされていないものが多い。第2に、政策論に終始しがちな日本の安全保障論にとって、アメリカの**理論的な研究**からは学ぶべき点が多い。そして、第3に、アメリカの**政策関連性**の高い安全保障論は、同国の安全保障政策を理解し評価する上で大変に役立つ。これは、日本にとって重要なことである。なぜならば、アメリカは、いまだに国際安全保障環境の現状に多大なる影響を与えている超大国であり、また、日本と共通の脅威・課題に直面している太平洋国家であり、そして、日本の平和と安全にとって死活的な同盟国であるからである。アメリカの安全保障政策は、日本の安全保障政策の与件ともなっている。

3) 概念や理論の具体例として日米の安全保障・防衛政策に注目している。

アメリカの安全保障論を説明する上で、アメリカ政府の安全保障政策に言及しないわけにはいかない。しかし、それだけでは、アメリカの安全保障論と安

全保障政策の単なる紹介に終わってしまう。アメリカの安全保障論を日本の観点から捉え直すことが私たち日本人にとって必要である。また、安全保障論を日本の読者にわかりやすく説明するには身近な例として日本の安全保障・防衛政策にも言及することが望ましい。本書は、伝統的な安全保障論とともに日本の安全保障や防衛に関する理解や考察を深めることを狙っている。ちなみに、防衛は、外交 (Diplomacy)、インテリジェンス (Intelligence)、軍事 (Military)、経済 (Economy) からなる安全保障の4要素 (DIME) のうち、軍事に相当するものである。

そこで、本書では、アメリカと日本の両政府がそれぞれ公表している、自国の安全保障の基本方針である国家安全保障戦略を取り上げる。すなわち、アメリカ政府の「**アメリカ合衆国の国家安全保障戦略報告** (National Security Strategy Report) (以下「**NSS 報告**」という) と、日本政府の「**国家安全保障戦略**」(以下「**安保戦略**」という) である。また、本書の第3部と第4部では、日本政府の「**国家防衛戦略**」(以下「**防衛戦略**」という) や、その前身の「**防衛計画の大綱**」(以下「**防衛大綱**」という) にも着目していく。防衛戦略 (2022, 2) は、「1976年以降6回策定してきた自衛隊を中核とした防衛力の整備、維持及び運用の基本的指針である」防衛大綱に代わって、安保戦略の下で「我が国の防衛目標、防衛目標を達成するためのアプローチ及びその手段を包括的に示す」文書である。もちろん、これらの公式文書が本当に両国による個別具体的な決定についての指針になっているのかについては議論の余地がある。国民や諸外国に対して自国の安全保障政策を正当化するための単なる美辞麗句ではないかという批判もある。しかし、これらは各国の政権の戦略的思考 (とその限界) を理解する上でまず読むべき基本文書であろう。

なお、安保戦略や防衛戦略とともに「安全保障関連3文書」と呼ばれているのが、「**防衛力整備計画**」(以下「**整備計画**」という) である。日本政府は、1985年から2018年まで8回にわたり、「防衛大綱で示された防衛力の目標水準の達成のために、5年間の経費の総額の限度と主要装備の整備数量を明示した」(2022年版防衛白書)「**中期防衛力整備計画**」(以下「**中期防**」という) を策定してきた。防衛戦略の下では、対象期間がおおむね10年となり、名称から「中期」という文字が削除された。

本書の構成・読み方

本書は、リアリズムから見た紛争と平和、リベラリズムから見た紛争と平和、防衛の戦略的アプローチ、および現代の安全保障課題という4部構成で、各部分は3章ずつとなっている。全体としては、序章と12章からなり、半年の授業で使われることを想定している。本書前半の第1部と第2部は安全保障の背景となる国際政治、特に国家間の紛争と平和の問題を取り上げ、後半の第3部と第4部は安全保障の中核となる防衛分野の戦略や政策に焦点を当てている。

各章の構成は、導入部分と3節からなる。各節は、その章のテーマに関連する基礎的な概念の説明や理論の解説、それに日本やアメリカの国家安全保障戦略の紹介を行っている。一つの節には、二つか三つの項がある。特に【発展】と書かれた見出しの項はやや高度な内容を含むので、初学者は読み飛ばしても差し支えない。なお、項とするには短い注に入れるには長い文章は、コラムとして独立させている。以上のとおり、単著のテキストとして体系性を重視したものとなっている。

そして、各章末には注と日本語で書かれた関連文献の案内をつけている。書籍のみならず学術論文にも慣れ親しんでもらうために、学会機関誌の特集号も掲載している。また、本の最後には、引用参考文献リストと索引を付した。ちなみに、文献案内だけに出てくる文献は、引用参考文献リストには含まれていない。

最後に本書の読み方についてアドバイスしておきたい。本書は、必読文献やそれに準ずる重要文献を紹介している。しかし、必読文献や重要文献であるからといって、いつでもどこでも「正しい」とは限らない。学問や政策に論争はつきものである。本書は、教科書であることから、本書の著者（以下「筆者」という）の個人的見解を強調することは回避したつもりである。むしろ、異なる見解を積極的に紹介している。性急に「正しい答え」を探そうとするのではなく、それぞれの文献を批判的に検討して、それぞれの見解の長所と短所について自分自身の頭で考えることを読者に期待したい。

第2版について

アメリカと日本で2022年に国家安全保障戦略の改定が行われた機会を捉え、本書の第2版を出すことにした。両国の国家安全保障戦略などに関連する記述は全面的に書き直しを行った。また、文献案内をアップデートするとともに、本の最後に索引を新たに設けた。全面改訂版と言える第2版のその他の主な変更点は、次のとおりである。

第1に、各章の節と項の並び方を見直した。初版では、原則として各章の第I節は基礎的な概念の説明を、第II節はアメリカや日本の国家安全保障戦略などの紹介を行い、最後の第III節は一般的な関連理論の解説で終わるように試みた。全章の構成の一貫性を重視した結果、いくつかの章では、項目の並び方が不自然になってしまった。第2版では、そのような本全体の一貫性を求めず、各章のスムーズな展開を重視している。また、【発展】マークをつける項も再検討した。なお、第1章と第2章については、古典的リアリズムとネオリアリズムの観点から二つの章をまとめて再編成した。

第2に、最近の国際情勢や重要性が増してきたキーワード、それに初版にも含めるべきだったと思われる概念や理論を中心に加筆した。第2版に新たに追加した節項は、次のとおりである。1章：はじめに、帝国主義とロシア(III節全体) / 3章：アメリカの対中関与政策(III節2項) / 5章：「自由で開かれたインド太平洋」ビジョン(コラム5-1) / 6章：日本の経済安全保障政策(コラム6-1) / 7章：抑止と連鎖反応(I節2項)、日本の抑止と防衛(III節)、武力の行使と武器の使用(コラム7-1) / 8章：安保3文書(2022)における日米同盟(コラム8-1) / 9章：リベラリズムの協調的安全保障(I節2項)、日本の安全保障協力(I節3項) / 10章：核革命の有無(I節2項)、【発展】核兵器拡散の是非(I節3項)、ポスト冷戦期における核戦略(II節2項) / 11章：対テロ戦争から大国間競争へ(III節3項) / 12章：日本のサイバー戦略(II節3項)

第3に、全体の長さが大幅に増えないように、本書後半の第3部と第4部を中心に、かなり難解な内容の項や重要性がやや低下した項とコラムを削除した。ただし、削除した文章の一部は、他の項や注に移動させた。



資料案内

公的文書・防衛白書

- ◆ NSS 報告 (アメリカ) : 米国防省歴史室のウェブサイト参照。このサイトには、他に国家防衛戦略、国家軍事戦略、4年ごとの国防政策の見直し (QDR)、国防長官年次報告なども所収している。
<https://history.defense.gov/Historical-Sources/National-Security-Strategy/>
- ◆ 安全保障関連3文書 (安保戦略・防衛戦略・整備計画) : 防衛省のウェブサイト参照。
<https://www.mod.go.jp/j/policy/agenda/guideline/index.html>
- ◆ 日米防衛協力のための指針 (ガイドライン) など日米安全保障体制の文書 : 防衛省のウェブサイト参照。
<https://www.mod.go.jp/j/approach/ampo/index.html>
- ◆ 過去の安保戦略・防衛大綱・中期防、ガイドラインなど : データベース「世界と日本」(政策研究大学院大学・東京大学東洋文化研究所) 内の「日本政治・国際関係データベース」参照。戦後日本の国際関係における重要文書がある。
<https://worldjpn.net/>
- ◆ 防衛省 (庁) 編『日本の防衛—防衛白書』(本書では「防衛白書」という) : 防衛省のウェブサイト参照 (全文検索可)。
http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_web/

学会機関誌

- ※ J-STAGE のウェブサイト参照 (刊行後2年以降の号のみ)。
- ◆ 日本国際政治学会編『国際政治』掲載論文
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/kokusaiseiji/list/-char/ja>
- ◆ 国際安全保障学会編『国際安全保障』掲載論文
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/kokusaiizenhosho/-char/ja>

安全保障論のシラバス

- ※ 発展的な文献案内については、以下の大学院授業のシラバス参照。
- ◆ Jack Levy, “Theories of War and Peace,” Columbia University, Fall 2021.
<https://fas-polisci.rutgers.edu/levy/syllabi/2021f%20Levy,%20Theories%20of%20War%20&%20Peace%20syllabus.pdf>
- ◆ Ronald Krebs, “International Security: A Survey of the Field,” The University of Minnesota, Spring 2017.
https://drive.google.com/file/d/1ORIK-di_cTj0cKEB82u0NEv04LDQ5UN/view

目次

まえがき i

序章 安全保障とは何か 1

はじめに 1

I 安全保障の概念 1

1 安全保障概念の定義 1 / 2 安全保障概念の拡張 3

II 学問領域としての安全保障論 4

1 安全保障論の位置付け 4 / 2 【発展】安全保障論の二分化 5

III アメリカと日本の国家安全保障観 7

1 アメリカにおける国家安全保障国の登場 7 / 2 アメリカの国家安全保障観 8
/ 3 日本の国家安全保障観 11

[コラム 0-1] 実証主義とポスト実証主義 6

[コラム 0-2] アメリカ国防省による国家安全保障の定義 10

[コラム 0-3] 日本の国家安全保障会議 12

第1部 リアリズムから見た紛争と平和 15

第1章 国家間の権力闘争 17

はじめに 17

I 分析のレベルと古典的リアリズム 18

1 国際政治の分析レベル 18 / 2 古典的リアリズムと人間性 19 / 3 【発展】
古典的リアリズムの他の原理 21

II 古典的リアリズムの勢力均衡論 22

1 勢力均衡の起源 22 / 2 勢力均衡の概要 23 / 3 【発展】勢力均衡の限界 25

III 帝国主義とロシア 27

1 帝国主義政策とリーダーの個性 27 / 2 ロシア・ウクライナ戦争 28 / 3 戦
争の原因 29

第2章 無政府状態と国家存立 33

はじめに 33

I 国家の主権と存立 34

1 国家主権の概念 34 / 2 国連は世界政府ではない 35 / 3 国家存立と日本

37

- II ネオリアリズムの理論 38
 - 1 国際システムの構造 38 /2 勢力均衡理論 40 /3 【発展】2 極平和論 41
- III 安全保障のジレンマ 42
 - 1 安全保障のジレンマの概念 42 /2 攻撃・防御の識別 44 /3 【発展】攻撃・防御バランス 46

第3章 覇権の盛衰 51

- はじめに 51
 - I 冷戦期からの国際構造の変化 52
 - 1 冷戦期の2 極世界 52 /2 ポスト冷戦期の単極世界 53 /3 【発展】単極平和論をめぐる論争 55
 - II リアリズムの覇権理論 57
 - 1 覇権戦争理論 57 /2 パワー移行理論 59 /3 【発展】動的格差理論 60
 - III 中国の台頭 62
 - 1 日米中のパワーバランスの変化 62 /2 アメリカの対中関与政策 63 /3 米中戦争? 64

第2部 リベラリズムから見た紛争と平和 69

第4章 民主的平和と普遍的価値 71

- はじめに 71
 - I 自由主義思想 72
 - 1 自由主義思想の起源 72 /2 自由主義思想の世界的な拡大 73 /3 現代の自由主義思想 75
 - II 民主的平和論 76
 - 1 民主化の波と後退 76 /2 ラセット著『パクス・デモクラティア』 77 /3 【発展】リアリストからの批判 79
 - III 普遍的価値と日米の戦略 81
 - 1 戦後日本の自由民主化 81 /2 アメリカの戦略 82 /3 日本の戦略 83

第5章 制度的平和と国際秩序 87

- はじめに 87
 - I 国際制度の理論 88
 - 1 レジーム概念と安全保障レジーム 88 /2 【発展】国際レジームに対する異なる見解 89

II 制度的平和論	91
1 集団安全保障の概念	91 / 2 国際連盟と国連における集団安全保障体制 93 / 3 国連軍への参加に関する日本政府の見解 94
III 国際秩序と日本	96
1 戦勝国による新秩序形成	96 / 2 リベラルな国際秩序 97 / 3 日本の安保戦略 99
[コラム 5-1] 「自由で開かれたインド太平洋」ビジョン	100

第6章 商業的平和と経済的繁栄 103

はじめに	103
I 経済の思想と政策	104
1 重商主義と自由放任主義	104 / 2 現代の国際経済秩序 105 / 3 経済と政治の関係 107
II 商業的平和論	109
1 相互依存関係と平和	109 / 2 相互依存関係と紛争 111 / 3 【発展】因果関係の問題 112
III 経済的繁栄と日本	113
1 貿易国家論	113 / 2 日本の吉田ドクトリンと安保戦略 115
[コラム 6-1] 日本の経済安全保障政策	117

第3部 防衛の戦略的アプローチ 121

第7章 自国の防衛体制 123

はじめに	123
I 軍事力の二面性	124
1 軍事力の特性	124 / 2 抑止と連鎖反応 126 / 3 抑止と防衛 127
II 日本の安心供与	129
1 憲法9条と自衛権	129 / 2 平和国家としての基本政策 131
III 日本の抑止と防衛	132
1 防衛力の役割と自衛隊の任務	132 / 2 防衛体制の強化 134 / 3 【発展】防衛力構想の変遷 136
[コラム 7-1] 武力の行使と武器の使用	133

第8章 同盟の形成と管理 139

はじめに 139

I 同盟の概念 140

1 同盟の定義 140 /2 勢力均衡の手段 141 /3 同盟政策のトレードオフ 143

II 同盟の理論 145

1 ネオリアリズムの同盟理論 145 /2 【発展】ネオリベラル制度論の同盟理論 146

III 日米同盟 148

1 日米安保条約 148 /2 日米安保体制の同盟化 149 /3 1990年代後半以降の展開 151

[コラム 8-1] 安保3文書(2022)における日米同盟 153

第9章 安全保障協力 155

はじめに 155

I 国際協調と安全保障協力 156

1 リアリズムと国際協調 156 /2 リベラリズムの協調的安全保障 157 /3 日本の安全保障協力 158

II 国連の平和活動 160

1 平和活動の分類 160 /2 平和維持活動 161

III 日本の国際平和協力活動 163

1 非軍事的な国際貢献(冷戦終結の頃) 163 /2 自衛隊による活動の始まり(1990年代) 165 /3 自衛隊による活動の拡大(2000年代～) 167

[コラム 9-1] 「武力の行使との一体化」論 168

第4部 現代の安全保障課題 171

第10章 核兵器の戦略と管理 173

はじめに 173

I 核兵器をめぐる論争 174

1 核抑止に関する二つの考え方 174 /2 核革命の有無 176 /3 【発展】核兵器拡散の是非 177

II アメリカの核戦略 179

1 冷戦期における核戦略 179 /2 ポスト冷戦期における核戦略 180

III 核兵器の軍備管理 182

- 1 米ソ間の核軍備管理 182 /2 多国間の核軍備管理 183 /3 核兵器に対する日本の取り組み 185

第11章 グローバル化 189

はじめに 189

I グローバル化とは何か 190

- 1 グローバル化の概念と歴史 190 /2 複合的相互依存関係 191 /3 グローバリズムとグローバル化 193

II グローバル化と国内紛争 194

- 1 武力紛争の傾向 194 /2 グローバル化と「新しい戦争」 195 /3 【発展】国内紛争の他の原因 197

III グローバル化と国際テロ 199

- 1 情報技術革命と国際テロ 199 /2 日本政府の認識 200 /3 対テロ戦争から大国間競争へ 202

第12章 グローバル・コモنز 207

はじめに 207

I 海洋・宇宙・サイバーの領域 208

- 1 海洋と宇宙空間の法 208 /2 海洋と宇宙空間における戦略 210 /3 サイバー空間とは 211

II 日本の領域別戦略 213

- 1 日本の海洋戦略 213 /2 日本の宇宙戦略 214 /3 日本のサイバー戦略 216

III サイバー革命論をめぐる論争 218

- 1 サイバー革命論 218 /2 【発展】サイバー革命論への懐疑 220

[コラム 12-1] 領域横断的な作戦 216

第2版あとがき 223

初版あとがき 225

引用参考文献リスト 229

索引 243

第 1 部

リアリズムから見た紛争と平和

イントロダクション

国際政治思想としての**現実主義** (realism) の源流としては、古代ギリシアの史家トゥキディデスが挙げられることが多い。今から 2500 年ほど前のペロポネソス戦争について彼が書いた古典『戦史』からは、現実主義思想のエッセンスを読み取ることができる。その後、16 世紀の**マキアヴェリ**、17 世紀の**ホッブズ**、18 世紀の**ルソー**などが近世・近代の現実主義思想の土台を築き上げた。現実主義思想の世界観は、国家間における**戦争状態** (いつ戦争が起きてもおかしくない状態) が常にあるというものである (Doyle 1997, 206)。

現実主義思想の流れをくむ**リアリズム**は、第二次世界大戦の前に主流であった**ユートピアニズム** (空想主義または広義の理想主義) への批判として登場した (本書第 2 部イントロダクション参照)。そして、冷戦の顕在化とともに、支配的な国際政治理論となった。まずは、後に**古典的リアリズム**と呼ばれるようになった理論がパワーへの欲望という人間性から国際政治の説明を試みた。冷戦の緊張の緩んだ 1970 年代には、リアリズムへの批判が高まったが、新冷戦と呼ばれた 80 年代には国際システムの構造に着目する**ネオリアリズム**として復活した。他方で、最強の一カ国による支配やリーダーシップに注目する**覇権的リアリズム**も独自の発展を遂げてきた。

その後もリアリズムの多様な理論が発展してきたが、全体としてリアリズムという理論的アプローチは、道徳的進歩と人間の可能性に関する悲観論に基づき次の三つの政治的前提を共有している。すなわち、(1) 国際問題は本質的に対立的である、(2) 国家などと呼ばれる集団こそが基本的な政治的アクターである、(3) 人間の動機においてパワーと安全保障が優先される、という前提である (Gilpin 1984, 290)。

本書の第 1 部は、リアリズムから見た紛争と平和というテーマに焦点を当てて、第 1 章で国家間の権力闘争 (古典的リアリズム) を、第 2 章で無政府状態と国家存立 (ネオリアリズム) を、そして第 3 章で覇権の盛衰 (覇権的リアリズム) を説明していく。

第1章 国家間の権力闘争

はじめに

イタリア＝ルネサンス期のニッコロ・マキアヴェリ（1469～1527）は、主著『君主論』（2018／原著 1532）において、普遍的な人間の本性に基づく現実主義の重要性を唱えている。「人間は邪悪なもので」あり「人間はもって生まれた性質に傾いて、そこから離れられない」との性悪説の前提に立って、以下のとおり君主の行動を論じている（同，148, 205）。

物事について想像の世界のことより、生々しい真実を追うほうがふさわしいと、わたしは思う。これまで多くの人は、現実のさまを見もせず知りもせずに、共和国や君主国のことを想像で論じてきた。しかし、人が現実にいるのと、人間いかに生きるべきかというとは、はなはだかけ離れている。だから人間いかに生きるべきかを見て、現に人が生きている現実の姿を見逃す人間は、自立するどころか、破滅を思い知らされるのが落ちである。なぜなら、何ごとにつけても善い行いをすると言言する人間は、よからぬ多数の人々のなかにあつて、破滅せざるをえない。したがつて、自分の身を守ろうとする君主は、よくない人間にもなれることを習い覚える必要がある。そして、この態度を、必要に応じて使つたり使わなかつたりしなくてはならない。（同，131-132）

君主には理想主義ではなく現実主義が必要であると明快な言葉で表している。宗教や道徳から政治を切り離すマキアヴェリの主張は、長い間曲解されて、目的のためなら手段を選ばないマキアヴェリズム（権謀術数主義）として批判されてきた。しかし、現在では近代政治学の出発点として高く評価されている。

本章では、古典的リアリズムの代表作であるモーゲンソー著『国際政治』に依拠しながら、紛争と平和の問題の一つとして国家間の権力闘争を取り上げる。第I節では、国際政治に関する分析のレベルの説明から始めて古典的リアリズムの原理を紹介する。第II節では、古典的リアリズムの観点から勢力均衡の概要と限界を説明する。そして、第III節では、帝国主義政策とリーダーの個性に

着目しつつ、ロシアによるウクライナ侵攻を考える。

I 分析のレベルと古典的リアリズム

本節では、国際政治に関する分析レベルについて説明を行った後、人間の本性に焦点を当てる古典的リアリズムの原理を紹介する。その主なポイントは一言で言えば、「力への意志という人間性故に国家は力の最大化を目指す」というものである。

1 国際政治の分析レベル

ケネス・ウォルツは、初期の代表作『人間・国家・戦争—国際政治の3つのイメージ』（2013/原著第2版1959）において、「戦争の主要原因はどこにあるか」という問いに対し**人間**、**国家の国内構造**、そして**国際システム**という三つの分析レベルを挙げて、それぞれを第1、第2、および第3のイメージと呼んだ。以下は、各イメージに関するウォルツによる議論の概要である。

人間のレベルに焦点を当てる**第1イメージ**は、「人間の邪悪さや誤った行動が戦争を導き、善良さが普遍化すれば平和となる」という考え方である（同、46）。人間の進歩を信じる楽観主義者は、人間が変われば戦争をなくすことが可能であると考えている。他方で、いくら教育や啓蒙活動を行っても生まれつきの人間の本性（欠陥）が変わらないと信じる悲観主義者は、戦争は起り続けると主張する。ウォルツは、第1イメージの悲観主義者の例として、人間の不変的な「権力への欲求」から国際政治現象を説明する、モーゲンソーらを取り上げている。

国家の国内構造に焦点を当てる**第2イメージ**は、「国家の欠陥」を戦争原因として捉え、国家の改革が世界平和のためには必要であると考えている。例えば、自由主義の考え方をとる一部の人は、専制主義国家は戦争を引き起こす悪い国家であり、反対に民主主義国家は平和をもたらす良い国家であると主張してきた。民主主義国家が平和的であるのは、兵士として命が危険にさらされる人々の意見が政策に反映できるということ（本書第4章参照）と、危険な行動をとろうとしている国家を国際世論により制裁できると考えたからであった。もう一つ例を挙げると、マルクス主義では、「資本主義国家が戦争の原因なの